



SANZUI vol.05_2014 autumn



特 集



SANZUI vol.05_2014 autumn

CONTENTS

「SANZUI」は、実演芸術のあらゆる魅力を伝えます。
実演芸術に触れた感動が水の流れるように
人々の身体の中に深く浸透し、潤し、育みますように。
そんな思いを込めました。
<http://www.cpra.jp/sanzui/>
(バックナンバーの閲覧・プレゼントの応募はこちらから)

公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会
実演家著作権隣接権センター(芸団協CPRA)

02-11

特集 ドキドキ

氷川きよし
ミシェル・マトロック
清水ミチコ
いのうえひでのり

12

ファンのドキドキ
J-POP／演劇／伝統芸能／お笑い

13

アンケート「なんでわざわざ生で観るんですか？」
コラム「“聴く”から“一緒に作る”へ」

14-15

美匠熟考

ひよっこりひょうたん島 ドン・ガバチョの人形
「NHK紅白歌合戦」の紙吹雪

16-17

カンゲキのススメ「オーケストラ」

18-19

裏舞台という名の表舞台
「背景美術」島倉二千六

20

若き実演家の未来 / 青柳いづみ

21

SANZUIぼっしょん
AWS学生アカベラプロジェクト

22

エッセイ
大西 洋

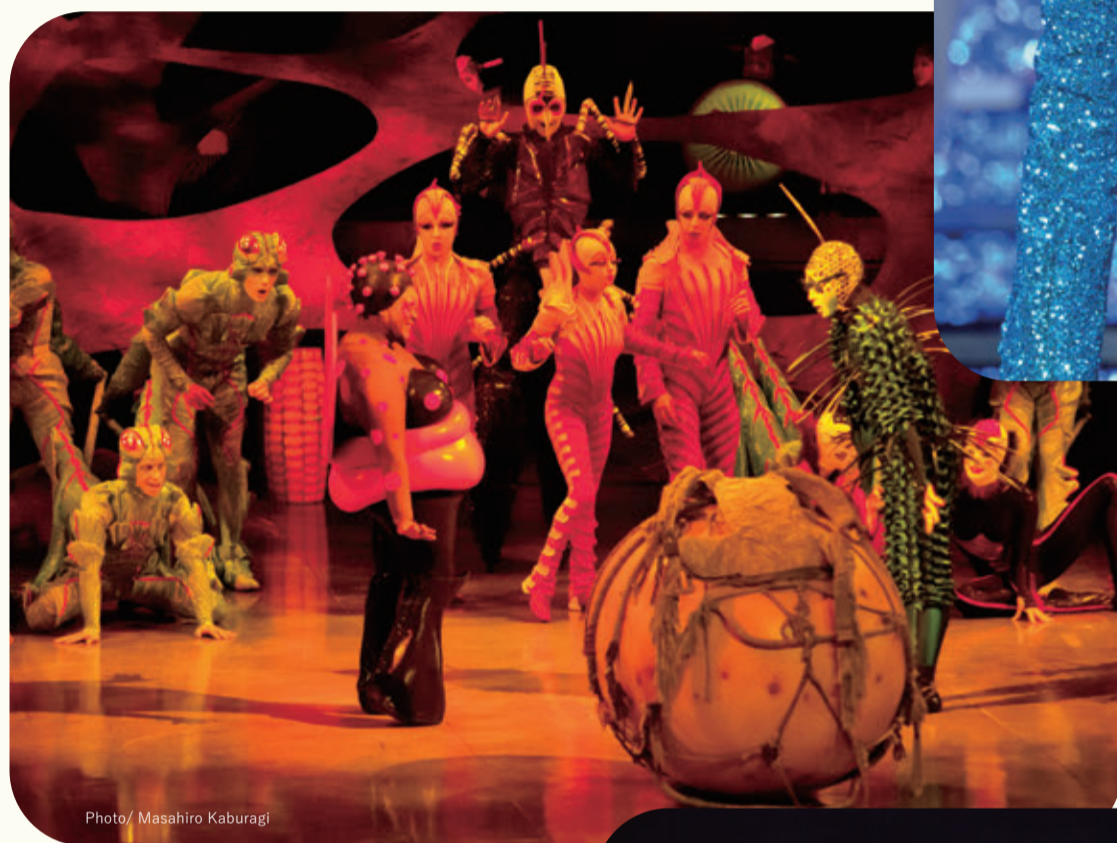
24-29

ロングインタビュー

仲間由紀恵

特 集

ドキドキ



Photo/ Masahiro Kaburagi



2012年『ZIPANG PUNK〜五右衛門ロックIII』

ドキドキは伝わる。

初めて脚本に目を通す時のドキドキ。
舞台の初日を迎える時のドキドキ。
今までにない役を演じる時のドキドキ。
そんなすべての緊張感や高揚感、ドキドキという感情は、
演者から観客に見事に伝導していく。
舞台の上の人間がドキドキしないと、
観ている人間もドキドキしないということである。

Text / Seiichi Tanbata(P.4-5), Natsuki Ishigami(P.6-7),
Eiichi Yoshimura(P.8-9), Rie Shintani(P.10-11)

氷川きよし

歌手



Photo/ Ko Hosokawa

「よろしくお願ひします」。服装はカジュアルだが律儀な笑顔であった。そして国民的スター歌手と向かい合わせて会話が弾んだ。歌手デビューは2000年。曲名は「箱根八里の半次郎」。衣裳から曲調まで古風な股旅演歌。身長178センチ、端正な風貌とは真逆な路線にもかかわらず、瞬く間にF2層（30代の女性）を中心に圧倒的な人気を集め、大晦日には新人ながら「第51回NHK紅白歌合戦」に初出場を果たした。以来、14回連続出場の記録を更新する。スター街道の始まりだ。

「アルバイトしながら見ていた番組に出場できたことにびっくりでした」。嬉しいドキドキ感の裏には、「この先、どうなるだろうか」という不安がつきまとっていたと明かす。股旅路線は第2弾「大井追っかけ音次郎」へと続き、第3弾の「きよしのズンドコ節」で、客席のペンライトの大躍動に進むべき灯りが見えたという。さらに「星空の秋子」に続き、台詞入りで朗々と歌い上げる「白雲の城」へと領域を広げ、3年後、「一剣」で栄えある第48回日本レコード大賞を受賞。歌謡界の頂点に登りつめた。目元は潤んでいたが涙はなかった。26歳の暮れであった。

氷川さんは「和服が好きなんです」と嬉しそうに、笑顔で話す。デビュー15周年記念曲「大根流月」の主人公は幕末の剣豪平手造酒。「彼の若い頃の着流し姿に扮していると、違う自分になれる。舞台俳優が見栄を切るときみたいです」。和装のドキドキ感について目を見開き、身を乗り出して話す。しかし声は優しい。

氷川さんならずとも歌手の醍醐味に「ライブ」がある。昨年は、「3日に1日（2回）公演」というハイペースで全国各地へコンサートツアーに出た。最終公演は、東京有楽町の国際フォーラムAホール（定員5,012席）で迎えた。舞台は4階建ての高さ。「一番高い席まで昇ってみました。そこからはステージ上の自分は豆粒程度にしか見えないことを実感しました。それでも観に来てくださるファンがいる。その人にも声を届くように心を込めて歌っています」。歌手の生命である「のど」についても同様だ。「いつでも最良の声で歌えるように。睡眠、大声で喋らない。ストレスがたまらない音をさがすこと」と「のど」のケアに努めていると明かす。スターの最大条件、「気配り」の男でもある。

したがって満員の客席は「きよしい〜」コールと「サイリウムライト」の花盛り。今年は15周年の記念公演として、10月7・8両日、日本武道館で単独公演を行う。「武道館はただ広だけでなく歌手にとっては最適な場所です。15年の歩みを感じ取ってもらい、感謝の気持ちを伝えたい」と願っている。氷川さんは最新のアルバム「昭和の演歌名曲集」で歌謡界の大先輩村田英雄の十八番「無法松の一生」を歌唱した。「ストーリーがいい。メロディーもいい」と浪曲演歌に挑戦した。氷川さんは、歌うときにいつも心掛けていることがある。「悲しい歌でも笑顔で締めた方がいい」と。話題の主演、氷川きよしは9月で37歳になる。彼の歌声と笑顔は混濁の日本を明るくしてくれる。

一番遠い席のお客様にも
感謝の気持ちを歌声で届けたい。

Hikawa Kiyoshi

PROFILE 福岡県出身。2000年、日本コロムビア創立90周年記念アーティストとして、シングル「箱根八里の半次郎」でデビュー。「やだねったら、やだね」のフレーズは日本新語・流行語大賞に選ばれるなど、一大旋風を巻き起こし、150万枚のセールスを記録。第42回日本レコード大賞最優秀新人賞、第15回日本ゴールドディスク大賞 ソング・オブ・ザ・イヤー（演歌・歌謡曲部門）他受賞多数。9月17日（水）に新シングル「ちょいとときまぐれ渡り鳥」を発売。<http://www.nagarapro.co.jp>

ミシェル・マトロック

アーティスト(シルク・ドゥ・ソレイユ)

PROFILE 米シアトル生まれ。ニューヨークの国立シェイクスピア・アカデミーにて古典演劇を修める。2001年、自身の脚本演出によるひとり芝居“マミープロジェクト”を開始。全米の大学やフェスティバルで上演される。2008年10月、『オーヴォ』の創作段階からシルク・ドゥ・ソレイユに参加。『ダイハツ オーヴォ』東京公演を終え、大阪(7/17~11/2)、名古屋(11/20~2015/2/1)、福岡(2/20~4/5)、仙台(4/23~6/7)を巡る。ovo-jp.com/



Photo/ Ko Hosokawa



Costumes : Liz Vandal ©2013 Fuji Television

Michelle Matlock

観客をとりこにする世界最高峰のサーカス。
案内役のパワーの源は観客の笑顔。

超人的なアクロバットと奇想天外な演出、圧倒的な世界観で、観客をめくるめく非日常へと誘うシルク・ドゥ・ソレイユ。単なる「サーカス」の枠組みには到底収まりきらない、そのドラマティックな舞台は、世界中でこれまで1億人以上もの観客たちの心をとりにしてきた。

現在公演中の『オーヴォ』はカラフルで躍動感に溢れ、生命の喜びに沸き立つ昆虫たちの世界へと観客を誘い込むファンタジーだ。個性的なヒロイン「レディーバグ」を演じるミシェルさんは創作段階から参加し、演出家たちと共に数年間かけてこの役柄を作り上げてきた。恋に恋するてんとう虫の女の子。元気いっぱい、とびきりチャーミングでハッピーな彼女の存在感は、登場しただけで舞台をパッと明るくする。

「そう感じてもらえると、とても嬉しい。彼女は私たち人間にとって大切なことを表現しているの。つまり愛、ロマンチックであること、楽観的であるといったことを」

セリフはないが、豊かな身振りや表情に加え、「ブルブル」といった“虫の言語”で他の虫たちと会話する。虫が羽を震わせているようでもあり、歌や楽器のようでもある、何とも心くすぐられる音色だ。英語か日本語かといった言語の壁を越えて、虫たちの心の動きがダイレクトに伝わってくる。

「昆虫の生態を学ぶなかで、私たち人間の耳には聞こえないだけで、虫たちはいろんな音を出してコミュニケーションしているはずだと気づいたんです。想像力を膨らませて、喜怒哀楽を表現しながらも虫らしさを失わない音色を試行

錯誤しました」

ももとは古典的なシェイクスピア演劇を学び、NYのダウントウンで舞台に立っていた。当時はシルク・ドゥ・ソレイユに特に関心を持ってはいなかったが、ある日突然オーディションに呼ばれたことで、新たな扉が開いた。

アスリート出身の俳優たちとは異なるバックグラウンドが、彼女にしか演じられないレディーバグを生むと同時に、シルク・ドゥ・ソレイユ独自の物語世界を支えている。

「人間離れたアクロバットにはみんなびっくりするけど、“私にはできない”と遠い世界のこのように感じてしまう。でも私が登場すると“あ、これなら私にもできる!”とホッとする(笑)。自分に近い、人間くさいキャラクターを通して初めて、昆虫たちの世界に感情移入できる。昆虫という設定だけれど、これは人間の物語でもあるんです」

虫たちのマイクロな世界を「等身大」に感じ、共感してもらうために。ミシェルさんはステージのたびに、目の前の観客たちと“ドキドキ(enchanting/心を奪われる)”を分かち合うことを大切にしている。

「観客の前に立つときが、一番ドキドキする。最初に日本に来たときは、客席が静かで不安だった。でも客席の間を練り歩く場面で一人ひとりの顔を見たら、みんな笑顔で目がキラキラしていて、心からショーを楽しんでいることが伝わってきた。役者を続けているのは、お客さんが私のパフォーマンスから感じた“ドキドキ”を、客席から返してくれるから。これからも観客との関係性を大切にしていきたいです」

清水ミチコ

芸人

観ていてドキドキしない舞台なんて、
観る方もやる方もつまらないでしょう。

まだアマチュアだった10代の清水ミチコさんがいちばんドキドキしたのは、タモリがパーソナリティーだったラジオの深夜番組や、『ビックリハウス』のような投稿雑誌で、自分が応募したネタが取りあげられるかどうかだった。

「ラジオでネタと名前が読み上げられたり、雑誌に掲載されたら、ドキドキを通り越して足が震えましたもん」

飛騨高山で暮らしていた高校生時代だ。大学進学のために上京した後は、やがてそうした足が震えるような魅惑の世界に次第に近づいていくようになる。

「最初は、芸能などの道に進もうという気はありませんでした。そもそも将来は実家の商売を継ぐつもりだったぐらい。デビューなんていうことはまったく考えていませんでした」

しかし、深夜番組への投稿をきっかけに、ラジオ番組のネタを考える構成作家にスカウトされ、のみならずそのネタの好評から自身も出演者になるにつれてアマチュアのドキドキは、プロフェッショナルならではの不安と恐れへと形を変えていくことになる。

「放送作家のついでにラジオに出るようになり、やがて素人でも出られるオーディション・コーナーがあった渋谷のライブハウスに芸人として出るようになりました。それからテレビに出て、レギュラー出演者になった頃から自分はこの世界でプロなんだという自覚が生まれました。同時に、芸人として常にドキドキするようになりました。デビューしてからもう何十年も経っているのに、いまでも新ネタをやるときはすごくこわい。“受けなかったらどうしよう”っ

という不安と、“受けすぎたらどうしよう”ってヘンな不安もあるんですよ。受けるためにやっているのに、受けすぎるのもこわいという自分でもよくわからない不思議な心理なのですが」

物真似が重要なレパトリーものまねなので、まねされるご本人の反応も気になる。

「自分が物真似をするのは自分が大好きな人。オーラのある人で、自らもそういう人になりたいという憧れの人なので、いつも愛を持って物真似はしています。その愛ならではの揶揄や毒が含まれてしまって、あ、これご本人が見たらどう思うのかなって不安もあります」

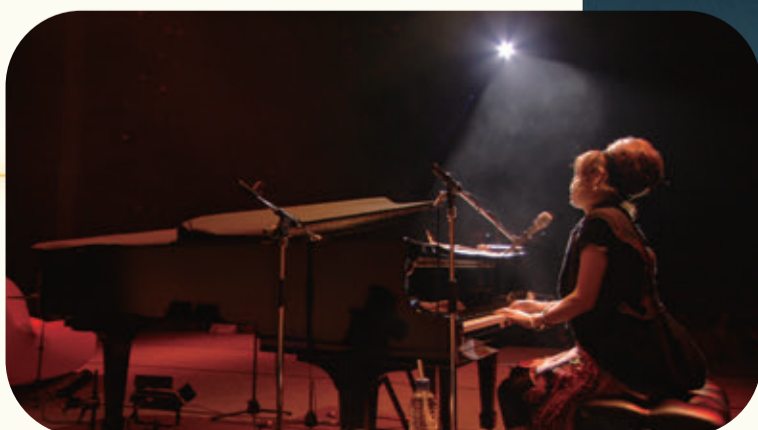
キャリアも重ね、ライブもいつも満員。自分自身が大御所となって安全地帯に行くことも可能かもしれないが、それではスリルとは無縁になってしまう。

「いまでも駆け出しの頃と同様にラジオのパーソナリティーがいちばん好きなんです。これは言いすぎかなっていう、生放送のギリギリのスリルを楽しんでいるところがある。物真似にしても舞台にしても、ドキドキするのは、やはりスリルのあるところに生まれる感情だと思うんです。ドキドキすることなく、まったく緊張もせずアガリもしないで本番に臨めるような人って、観ているほうもスリルや魅力を感じないんじゃないでしょうか」

芸が受けるということは、自分自身の存在が受け入れられるということ。芸人としての醍醐味は、ギリギリの芸を通して自分という存在が世の中に受け入れられるかどうかのドキドキにあるということだろう。



Photo/ Ko Hosokawa



PROFILE 岐阜県高山市生まれ。上京後、ラジオ番組の構成作家を経てタレント活動に。テレビCMでの声の出演を皮切りに、音楽と絡めた物真似などの活動が人気に。1987年よりフジテレビ『笑っていいとも!』にレギュラー出演をし、人気が全国区のものとなる。テレビ、ライブ、俳優、執筆など多岐にわたるジャンルで活躍中。1988年、ゴールデンアロー賞芸能新人賞受賞。

Shimizu Michiko

いのうえひでのり

劇団☆新感線主宰/演出家



2011年『鶴籠城の七人』



Photo/ Ko Hosokawa



2012年『ZIPANG PUNK〜五右衛門ロックIII』



2014年『春の乱』

昔も今もやっていることは変わらない。
舞台の面白さは、現実を忘れられること。

今やなかなかチケットが取れない活劇集団として圧倒的
人気を誇る「劇団☆新感線」。彼らの舞台を映画館で観る
新しい鑑賞スタイルの「ゲキ×シネ」も10周年を迎え、ま
すますファンを増やしている。その新感線の旗揚げメン
バーであり、主宰・作家・演出家として34年間にわたり劇
団を支えている、いのうえひでのりさん。「最初は、こん
なにも長く続くとは思っていなかった」という背景には、
彼と演劇と人との意外で素敵な出会いがあった。

「もともと映画が好きだったんです。中学2年のときにブ
ルース・リーの映画に出会って、はまって、映画館に通い
ました。新感線のベースでもあるチャンバラは、間違いなく
ブルース・リーがきっかけです。その後は、千葉真一さん
の空手アクション映画を観るようになって。なかでも当時
映画館で観て、ものすごい衝撃的だったのが『直撃地獄
拳 大逆転』。この映画からも大きく影響を受けています。
誰が観るんだろうっていうくらい注目度の低かったへんて
こりんな映画なんですけど、僕にとってはすごく面白くて。
後で知ったんですが、新感線の座付き作家の中島かずきも
同じ時期にその映画を観ていたんです。僕は福岡で、彼は
筑豊で。なんか、つながっていたんですね」

そして2人は高校時代に出会う。演劇の大会で勝ち進ん
でいたいのうえさんの舞台の面白さに感動した中島さん
は、その劇をモチーフにオリジナル脚本を執筆。それをい
のうえさんに送ったことで、交流がはじまった。

「かれこれもう三十数年の付き合いですね。でも、そもそ

も僕が演劇の道に進んだのは仕方なかったというか。自主
映画を作りたいかったのに高校に映画研究部がなくて、似て
いるからまあいいかと思って選んだのが演劇部（笑）。高
校時代はコンサートみたいな大音量で好きなロックをかけ
られるような劇をやっていました。新感線でも『五右衛門
ロック』のような音楽曲を多数とり入れたRシリーズがあ
るので、そう考えると、昔も今もやっていることはあまり
変わらないのかもしれないですね」

卒業後は大阪芸術大学芸術学部舞台芸術学科に進み、つ
かこうへい作品『熱海殺人事件』にて「劇団☆新感線」を
旗揚げ。ずっと交流のあった中島さんは、1985年から劇団
に参加している。このまま芝居で食べていけたらいいなあ
と、漠然と将来を夢みているうちに「あっという間に50代
です」と、笑う。

好きこそもの上手なれ。演劇が好きであることはもち
ろん、ドキドキさせてくれる何かがあるからこそ、続けた
くなるのだろう。演出家としては、最初に脚本を読むとき、
舞台の初日を迎えるときに毎回ドキドキを味わうそうだが、
一番のドキドキは、やはり舞台そのもののなかに――。
「舞台の面白さは、現実じゃない世界、異空間や異次元に
連れていってくれることなんです。芝居を見ている時間だ
けは別の世界に入っていける、現実を忘れられる。それが
楽しさであり、たまらなくドキドキするんですよ」

そう語るいのうえさんの瞳は、きっと中学時代と変わら
ない輝きを放っている。

PROFILE 福岡県出身。1980年に劇団☆新感線を旗揚げ。以降、
音楽を前面に出した“Rシリーズ”、作・演出を行う笑いをふんだんに
盛り込んだ“ネタもの”、ドラマ性に富んだ外連味たっぷりの時代活
劇“いのうえ歌舞伎”など、エンターテインメント性にあふれた多彩な
作品群で“新感線”という新たなジャンルを確立させた。劇団外でも、
『今ひとたびの修羅』、『断色』(13)など、プロデュース公演の演出を
多数手掛けている。第9回千田是也賞ほか受賞。

ファンのドキドキ

やっぱり生のステージがいい!

DVDやCDではなく、ライブならではの楽しみ方はいかに?!

- ①どのくらいの頻度で公演会場に足を運びますか?
- ②DVDやグッズをお持ちですか? ③公演当日までどう過ごしますか?
- ④公演に通う楽しみのポイント



演劇

橘 薫(留学支援団体勤務)

- ①1~2か月に1回。仕事をしていると時間も限られるので、好きな劇団の公演に絞って母親、妹と協力してチケットを取ってみんなで観劇を楽しんでいる。
- ②見逃した作品をDVDで観ることもあるけど、生で観るのがいい。
- ③長期間やっている公演は、少しずつ変わっていくもの。ネットで観た人の感想をみていると、実際に目にする舞台がどうなっているかとても楽しみ。
- ④数か月前にチケットを取るの、急に仕事が入らないかハラハラ。行けなくなると、代休の日に当日券に並ぶことも。役者さんのエネルギーやお客さんの熱気を含め、劇場空間はとても刺激的。日常の中にそうした時間を持つことが私には必要不可欠。



J-POP

遠藤健司、増淵颯紀(専門学校生)

- ①月に1~2回。友達と行っても、ライブの間は自分の世界、アーティストとの世界に入る。終わった後やその後数日ライブの感想を言いあったり、他の友達に自慢したりでライブの感動が続く。
- ②ライブ前は特にDVDを見る。Tシャツも買って備える。
- ③前の日は興奮して眠れなくなる。当日は、ライブに集中したくて、他の時間に音楽をきくときは、あえて違うアーティストの音楽をかける(え)。数日前からカウントダウンしているような感じ。ライブ当日もそのアーティストの曲を聴いてわくわくする(ま)。
- ④ライブはCDとは違う歌い方をしていたり、生の音楽や演出が楽しみ。余韻にひたって、またがんばろうと思える。LDHはチームが大きくてバリエーションが楽しめてすごくカッコいい。近郊であるライブにはできるだけ行きたい!

和泉直蒼(メディアデザイナー)

- ①仕事で関係することもあって舞台上に足を運ぶことは多いけど、個人的な楽しみとして月に1回程度、能や歌舞伎を観る。
- ②伝統芸能はライブでない! メディアに圧縮されたものでは味わえないと思う。
- ③伝統芸能は共通する演目もあり、鑑賞予定のものを違うジャンルで事前に観たり、少し調べていると、また違う見方ができるから面白い。もちろん、予備知識がなくてもそのときどきの受け止め方ができる。
- ④日本の伝統芸能は、外国のものに比べても細やかな洗練された表現を感じる。まさしく解像度が違う感じ。デザイナーとしても、そういった芸術性を味わうことで刺激を受けている。



伝統芸能



お笑い

金澤里沙(専門学校生)

- ①群馬から上京して、好きな芸人さんのライブに3か月で30回行った。お笑いに興味をもったのは、テレビがきっかけで、生でライブを初めて見たとき、間近で芸人さんやお客さんのリアクションを感じて楽しくてはまった。
- ②また観たい!と思うので、好きな芸人さんのDVDは全部持っている。テレビもビデオに録って好きなコントがいつでも観られるように編集している。朝観て元気をもらうことも。
- ③ライブ前日は興奮して眠れなくなることもある。
- ④自分でネタをつくって、お芝居もできる芸人さんは憧れの存在。面白くて、もっと近くで観たくてライブに通っている。ライブを観ると元気になるし、私もうがんばろうと思う!

なんでわざわざ生で観るんですか?

(Webアンケートへの投稿より)

【ロック・ポップス】 CDやテレビだと、どうしても「日常感」が勝っちゃう。ライブは、他のことをしながらでは聴けない。その状態にお金を払っているんだと思う。好きなメンバーの汗まで見えるし!(笑)(菅原鮎佳/20代/女性)
お客さんの反応とミュージシャンの気迫が影響を与えあうのは生ならではの(二者択一で失敗/40代/男性)

【演劇】 生で聞く役者さんの声は、自分の耳に直接届く感じがします。それに感情が乗っていると、自分のこととして響く。演劇の場合は、静かなシーンを作るためには自分も協力しなきゃいけない。その緊張感を味わいに行っているのかも(寺本一樹/20代/男性)

【アイドル】 DVDでは映らない、ステージの真ん中じゃないところでもすごく考えて動いていて、プロ意識を感じます(ぐに/20代/女性)
掛け合いなどで一緒に盛り上げられるのが楽しい(野村尚希/10代/男性)

【クラシック】 会場の空気が変わったように感じ引きずり込まれたことがある。空間に音が響いて消えるのが聴こえる、演奏者の緊張も集中も伝わってくるのは生でない味わえない(たーちゃん/30代/女性)

【ミュージカル】 劇場では、周りが身動きしないで観ているとわかる。ああ、みんなも同じところに見入ってるんだ、っていうのが伝わってきて面白い(高野由紀/20代/女性)

【オペラ】 「パン要らぬ光と愛と詩で生きる」一息きた人間が演じる生の舞台は光であり、愛であり詩です。詩があれば死も病も怖くありません(知財忍者・青い蚕/20代/男性)

“聴く”から“一緒に作る”へ。ライブの楽しみ方が広がってきた!

文=長谷川 誠(音楽ライター)

近年、ライブの楽しみ方が“聴く”から“参加する”という方向へシフトしてきている。この変化はどうして起こったのだろうか? 00年代に入って、CDの売り上げが減少する一方、スマホやパソコンなどで楽曲をダウンロードしたり、YouTubeなどの動画共有サービスを利用したりと、鑑賞方法がよりパーソナルなものになってきたことが大きな要因として考えられそうだ。クローズドな聴き方が一般化することで、相対的に“音楽体験を共有できる場”としてのコンサートの需要が高まってきた。フェスの隆盛もその表れのひとつだろう。ライブに行くことがアミューズメントパークで遊ぶ感覚に近くなってきた。

演奏者もその傾向を加速させている。一緒に歌う、踊る、手拍子する、タオルを回すなどからさらに踏み込んだ演出が目につくようになってきた。UVERworld、BUMP OF

CHICKEN、ももいろクローバーZなどが導入しているザイロバンド(遠隔操作によって、内蔵のLEDが光るリストバンド)はその顕著な例だろう。L'Arc-en-CielのL'edバンド、SEKAI NO OWARIのスターライトリングなど、独自のリストバンドを使用するバンドもいる。昔からペンライトを振る楽しみ方はあったが、コンピュータ制御されたザイロバンドで、より緻密に歌と連動した演出が可能になった。歌詞に“青い”という形容詞が登場した瞬間に会場が青一色になったり、“虹”という単語が歌われた瞬間に七色に光ったり。全員参加のライティングは観る側にも演奏者側にも濃密な一体感と高揚感をもたらしていく。事前にドレスコードを提示したり、仮装を推奨したりするケースも増えてきた。照明から衣装まで、観客が演出の一端を担うようになると、ライブの楽しみ

は当日だけでなく、フリの練習、服装やグッズの用意など、準備段階まで拡張されていく。

フェスが多数開催されることで観客側の楽しみ方の種類も豊富になってきた。ダンスロック系バンドの躍進もフェスの隆盛と無関係ではないだろう。汗だくになって踊って楽しむのはライブの大きな醍醐味だ。ただし、すべてがその方向だけに特化し、画一化していくのはつまらない。多様で自由であるところにも音楽の素晴らしさがあるからだ。“聴く”から“参加する”へ。さらに“一緒に作る”へ。観客がクリエイティブに、そして能動的に関わることで楽しみ方は広がっていく。ライブという非日常の空間でドキドキすることは日常生活を送る上でも糧となるだろう。ライブの果たす役割もさらに大きくなってきている。

中村孝男
(人形劇団ひとみ座代表)
Nakamura Takao

ひょっこりひょうたん島
ドン・ガバチョの人形

1960年代NHKで放送され人気を博した人形劇「ひょっこりひょうたん島」で、政治家ドン・ガバチョは中心的な存在です。この人形は、リメイクの際に作りました。

ひょうたん島の人形は皆からくりがあり、ドン・ガバチョの場合、ひげと黒目が動きます。驚いたとき、黒目が白目から飛び出すのが面白い。左と右の黒目をわざとずらしてひょうきんさを出しています。

オリジナル版は15分間長回しで撮影したため、一つのキャラクターでも色々なパターンの人形を用意し、瞬時に取り替えて対応しました。遠くにいる場面用に小さなドン・ガバチョなんかも作ったんですよ。

ひょうたん島には舞台版もあります。井上・山元両氏が脚本を書いてくれました。1967年から今日まで全国を回っています。

ひとみ座といえばひょうたん島、というほど有名な作品。大切にしていきたいです。



©井上ひさし/山元護久・ひとみ座・NEP21
キャラクターデザイン片岡昌 協力:人形劇団ひとみ座

Number:009

Puppet of Don Gabacho

寺坂直毅(放送作家、紅白マイスター)
Terasaka Naoki

「NHK紅白歌合戦」の
紙吹雪

「NHK紅白歌合戦」の演出において、紙吹雪によるシーンは必須である。初めて大規模で使用したのは、1981年の大トリ、北島三郎「風雪ながれ旅」。画面すべて真っ白。口にも紙吹雪が入り、後のインタビューで「NHKは俺を山羊と勘違いした」と嘆いたのは有名な話。その後徐々に進化。1984年、森進一「北の蛍」は、白い紙吹雪を赤く照らし、蛍が乱舞するような妖艶な演出に。1988年、北島三郎「年輪」では、81年同様、口に張りついたが、「いつか大黒柱になる」という風な歌詞の時、吐息で雪が口から飛んでいくのを見て、曲への思いと歌唱力の凄さに驚いた。昨今で印象深かったのは、2012年のYUKI「プリズム」の星の形をした吹雪。サビで、偶然、頭の上に一つの星吹雪が舞い降り、その姿が「天使」のようだと話題になった。紙吹雪は歌番組演出に想定外の奇跡を与える、重要なアイテムなのだ。



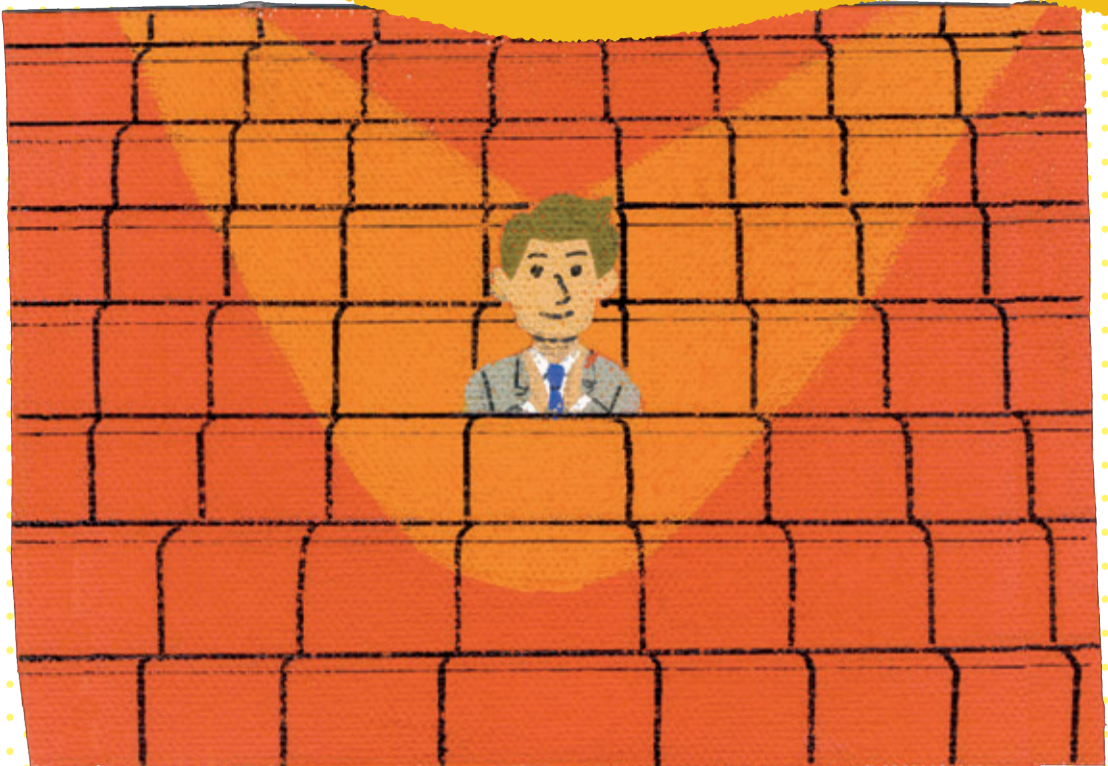
Number:010

Confetti

大勢で音楽を奏でるオーケストラ。迫力ある演奏から繊細なハーモニーまで、クラシック音楽の楽しみが詰まっています。コンサートホールで音のシャワーを感じよう！

座席選びに迷ったら、真ん中へ

オーケストラの演奏会がひらかれる大きなコンサートホール、どこに座ろう？と迷ったら、真ん中がお勧めです。音は広い空間に響きわたるので、前列よりも中央から後方の席の方が色々な音がバランスよく聴こえます。また、会場によっては、オーケストラの後ろから指揮者を正面から見られる座席があることも。コスト面では壁際や後ろの席がお勧め。演奏も十分楽しめます。まずは気軽に行ってみよう！



コンサートマスターはチームのキャプテン

指揮者は、テンポや音のイメージなど音楽の方向性を示す監督の役割ですが、公演によって変わります。オーケストラの一員として常にメンバーを引っ張っていくキャプテンのような存在が「コンサートマスター」。音合わせのときにヴァイオリンを弾くので、すぐわかります。細かな音の出だしや微妙なニュアンスは、コンサートマスターの弓の動きをみることで察知できます。オーケストラ奏者は、指揮者だけでなく、コンサートマスターを視野に入れて演奏しているんです。



感動したら拍手！でもタイミングが大切

オーケストラ鑑賞の拍手のタイミングはちょっと独特。感動的な盛り上がりの後に、ふっと静かになって曲が終わったと思っても、拍手しない時があります。交響曲は4つ前後の楽章でつくられていて、楽章の間は通常拍手がありません。様々な情景が織りなされる演奏をじっくり聴いて、指揮者が腕を下して力を抜くとき、振り返ったときに拍手する、それが一番安心かも。



知ってみよう、ふれてみよう！楽器のヒミツ

オーケストラの多くの楽器は、その昔、狩りや合図、祭礼などに使うために、自然の中から見出されました。動物の角や巻き貝からできた金管楽器、動物の骨や角、アシなどの植物からできた木管楽器は、息づかいで音色や音量がガラリと変わります。弦楽器や打楽器はどうでしょう？ 楽器体験などを通して、それぞれどうやって音を出しているのか、どんな音が出るのか間近に感じると、さらに曲を聴く楽しみも広がります！

いろんな曲が楽しめる定期演奏会

オーケストラの活動は、年間のプログラムを組んだ定期演奏会が核になっています。2公演設けられているところも多いので、予定もあわせやすく、1年を通していろんな曲を聴くことができます。初めての人は知っている曲や気になるソリストの公演を選んでみては？ さらに年間の会員になるととってもお得で、毎回お気に入りの席で聴けます。

	団体名	チケットお問合せ	ウェブサイト
北海道 東北	札幌交響楽団	011-520-1771	http://www.sso.or.jp
	仙台フィルハーモニー管弦楽団	022-225-3934	http://www.sendaiphil.jp
	山形交響楽団	023-625-2204	http://www.yamakyuo.or.jp
	群馬交響楽団	027-322-4316	http://gunkyo.com
	NHK交響楽団	03-3465-1780	http://www.nhkso.or.jp
関東 首都圏	新日本フィルハーモニー交響楽団	03-5610-3815	http://www.njp.or.jp
	東京交響楽団	044-520-1511	http://tokyosymphony.jp
	東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団	03-5624-4002	http://www.cityphil.jp
	東京都交響楽団	03-3822-0727	http://www.tms.or.jp
	東京ニューシティ管弦楽団	03-5933-3222	http://tnco.or.jp
	東京フィルハーモニー交響楽団	03-5353-9522	http://www.tpo.or.jp
	日本フィルハーモニー交響楽団	03-5378-5911	http://www.japanphil.or.jp
	読売日本交響楽団	0570-00-4390	http://yomikyo.or.jp
	神奈川フィルハーモニー管弦楽団	045-226-5107	http://www.kanaphil.or.jp
	セントラル愛知交響楽団	052-581-3851	http://www.caso.jp
中部	名古屋フィルハーモニー交響楽団	052-339-5666	http://www.nagoya-phil.or.jp
	オーケストラ・アンサンブル金沢	076-232-8632 (石川県立音楽堂)	http://www.oek.jp
	京都市交響楽団	075-711-3110	http://www.kyoto-symphony.jp
	大阪交響楽団	072-226-5522	http://www.sym.jp
関西	大阪フィルハーモニー交響楽団	06-6656-4890	http://www.osaka-phil.com
	関西フィルハーモニー管弦楽団	06-6577-1381	http://www.kansaiphil.jp
	日本センチュリー交響楽団	06-6868-3030	http://www.century-orchestra.jp
	兵庫芸術文化センター管弦楽団	0798-68-0255 (兵庫県立芸術文化センター)	http://hpac-orc.jp
中国・四国 九州	広島交響楽団	082-532-3080	http://hirokkyo.or.jp
	九州交響楽団	092-823-0101	http://www.kyukyo.or.jp

※日本オーケストラ連盟ウェブサイトより、会員団体の演奏会情報をご確認いただけます。 <http://www.orchestra.or.jp>

裏舞台 という名の 表舞台

多くの人たちによってつくられる舞台。
主役のまわりに視線を転じてみると、
至る所にプロの技が輝いている。
舞台を支える人に光を当てる。

STAGE 08

背景美術

Background Art

島倉 二千六

Shimakura Fuchimu



Photo / Ko Hosokawa Text / Taisuke Shimanuki

映画監督・黒澤明の遺作『まあだだよ』。そのラストシーンの、オレンジ、緑、紫……とオーロラのように色彩を変えていく夕焼け空にマシュマロのような雲が浮かぶ夢の情景を記憶している人も少なくないだろう。島倉二千六さんは、その摩訶不思議な空を描いた背景美術家である。

「ある日、黒澤監督から朝8時半に呼び出されて、いきなりスケッチを見せられたんですよ。『夢で見た空なんだけど、これを描いてもらえないかい?』って(笑)」。映画界で「天皇」とも呼ばれた黒澤監督から指名を受けた美術家はそうはいない。島倉さんは悪戦苦闘しながらも、照明家の力を借りてリクエストに応じてみせた。その見事な出来に監督は惜しめない賛辞を送ったそうだ。映像制作にかかわる人々は、島倉さんを尊敬の念を抱いて「雲屋さん」と呼ぶ。それは、彼が描く空や雲が人の心を動かすことを知っているからだ。

故郷の新潟で看板屋に勤めていた島倉さんが映画界に飛び込んだのは、17歳の頃。一足先に、撮影現場のスチールカメラマンとして働いていた兄の勧めを受けてのことだ。

「今井正監督や山本薩夫監督が設立した新星映画社で約3年、小道具などの美術を担当していました。ある日、東宝の撮影スタジオを訪ねる機会があって、そこで写真と見紛うような雲の絵を見たんです。その感

動が忘れられず、東宝の門を叩きました」

だが、厳しい職人の世界が健在だった時代だ。いきなり雲を描かせてもらえるわけもなく、昼は助手として働き、夜は先輩から紹介された特撮ドラマの現場で働いた。「東宝で先輩だった成田亨さんから『どうせ東宝じゃ雲は描かせてもらえないだろう。だったら俺の仕事を手伝えよ』と言われて。当時、円谷英二さんが『ウルトラマン』の制作を開始していて背景美術を描ける人間を探していたんです」

初代ウルトラマンに始まり、『ウルトラセブン』『〜タロウ』など、ほぼすべてのウルトラシリーズの現場に携わった経験はその後のキャリア形成にとって代え難いものだったという。その後、東宝から独立した島倉さんは、映画や特撮だけでなく、コマーシャルフィルムや博物館に展示するジオラマの背景美術なども手がけるようになる。その頃には、雲の専門家として誰もが一目置く存在になっていた。

「雲や空を描く難しさは、雰囲気をはかに出すか。背景ですから、その前に立つ役者より目立ってはいけません。でも、空が画面の大半を占めることはとても多いので、おざなりでもダメ。歌舞伎の黒子のように出しゃばらず。でも、夏の爽やかさやこれから起こる不穏な事態を瞬間的に感じさせるような存在感を持った雰囲気を出すのが醍醐味です」

コンピュータ・グラフィックス全盛の現在、手描きの背景美術は残念ながら主流とは言えない。だが、それでも島倉さんへの仕事のオファーが絶えないのは、その職人的なこだわりへの信頼と、手描きだからこそその「味」に魅了されるからだ。

「CGでは表現できない雲を描きたいというも思っています。スペクタクルを感じさせる荒々しい雲だけでなく、寂しさを感じさせるような静かな雲だとか。旅が好きで、特にシルクロードは40年近く通っていますが、チベットやモンゴルの高地で目にす

るような鮮烈な色にはなかなか追いつけない。でも、だからこそ現実とはちょっと違う雲をみなさんに届けたい」

半世紀にわたって雲を描き続けてきた島倉さん。理想の雲を追い求める旅は、まだ終わらない。

PROFILE 1940年新潟県生まれ。版画家を志して17歳で上京。今井正、山本薩夫、亀井文夫らが創立した独立プロダクションに美術スタッフとして参加。その後、東宝と契約。CMなどの背景美術を手がけるかわら円谷プロ作品にも参加し、『ウルトラマン』シリーズなど多数の特撮作品で腕を振るう。現在は自身の工房「アトリエ雲」を設立。映画、CMなどのほか、全国の博物館・資料館に展示されたジオラマの背景画の制作を行う。





Photo / Kota Sugawara

夢中になる 創造の世界

青柳いづみ
Aoyagi Izumi

PROFILE 1986年生まれ。桜美林大学にて演劇を専攻。2007年、藤田貴大率いるマームとジブシーの旗揚げに参加。翌年、チェルフィッチュ『三月の5日間』ザルツブルグ公演に参加。以降、両劇団に平行して出演し、国内外で活動。マームとジブシーは独特の表現手法でも注目される劇団で、2013年に主演した『cocoon』は話題作となった。9月29日～10月13日、東京芸術劇場にて野田秀樹作、藤田貴大演出『小指の思い出』に出演予定。

中学から演劇畑。当時の担任に背中を押されて進んだ演劇専攻の大学で、2人の演出家との出会いがあった。「この人たちとともに作品をつくり続けたい！」その一心から舞台に立ち、現在に至る。

作品は、最終的に俳優である自分の表現を通してお客さんの目の前に現れる。その責任の重さもあり、本番は自分が削られるような感覚、つらい気持ちもあるようだ。「自分は何もつくれない。でも、

演出家たちと作品創造することで、思ってもみなかった形になる。演出家のやりたいことは、まだまだあるはず。それを一緒につくっていきたい。」

舞台は生のメディア、紙面や映像と違って一気には広がらないし、一挙手一投足が違わずに繰り返されることもない。演出家との共同作業で、一番面白い！と夢中に取り組んでいる「いま」をぜひみてほしい。

最近色々な公演のフライヤーが面白くなってきている。ここでは9月から12月に上演される、劇団・ダンス・演奏会などのフライヤーの中から、ちょっと気になるものを、本誌アートディレクターが選んでみた。



KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2014
木ノ下歌舞伎『三人吉三』
2014年10月11日(土)12日(日) / 京都芸術劇場 春秋座
監修・補綴:木ノ下裕一 / 演出・美術:杉原邦生 / 作:河竹黙阿弥
デザイン:外山央

銀と黒で印刷された文字中心のシンプルなフライヤーだけに、手に取って読みたくなる。同じ吉三郎という名を持つアウトロー3人の物語を、3本のラインで表現したり、書体や紙の選び方など、細部まで凝ったデザインが素敵。人物相関図が複雑なので、フライヤーの裏面で予習してから観るといいかも。

新村則人=アートディレクター。1960年生まれ。主な仕事に資生堂、無印良品、エスエス製薬、東京オリンピック招致など。JAGDA・東京ADC会員。



青年団『暗愚小傳』
2014年10月17日(金)～27日(月) / 吉祥寺シアター
作・演出:平田オリザ
デザイン:AD=工藤規雄 D(表面)=上野久美子
写真:佐藤孝仁

写真の素晴らしさに感動し、どうしても選びたかったフライヤー。よく見ると写っている鳥は剥製ののだが、逆にそれが良かったりする。鳥が2羽いることや富士山をバックにしていることで高村光太郎の「暗愚小伝」を想起させるし、タイトルの文字も凝っていて、写真の魅力を倍増させている気がする。



Always With Smile — AWS学生アカペラプロジェクトは、2011年3月の東日本大震災を受けて、歌うことを通して何かできないか、そういった思いが繋がったのがはじまりだった。発起人は、ゴスペラーズの北山陽一さん。WAVOC（平山郁夫記念ボランティアセンター）の支援のもと、2012年11月から月に1回、学生たちが気仙沼の仮設住宅の集会所などを訪れているほか、女川町や関東の学校や介護施設などでも活動している。

はじめての人も含め、毎回15人程度のメンバーで土曜の朝に東京を出る。練習は気仙沼に向かうバスの中だ。1

泊2日で2カ所を訪問し、アカペラを楽しんでもらったり、集まったみなさんと交流会をしたり、アカペラのワークショップを行うことも。メンバーの吉埜大空さんは、大学のプロジェクトで気仙沼の仮設商店街の情報発信に協力していた。AWSの活動を知って自ら参加するようになって、地域の人たちとの橋渡しも担った。「いろんな人と一緒に歌えるし、みなさんとお話ができるのも楽しい。アカペラは相手の声に耳を傾ける協調性が必要。自分の心をひらかないといけないし、心と心をつなげる力があると思う」

当初から参加していた高橋紀里子さんは、歌が好きだけ

ど、前に出るようなタイプではなかった。それが、去る3月の卒業まで学生代表を務め周囲も驚くほど成長した。「色々経験した分、後輩に教えてあげられるようになった。毎月違う仮設住宅にうかがって、初対面の人と会話をするのにとまどったこともあった。でも、音楽は心に届いていると感じるし、空気が変わるのがすごい」

AWSは、30年は続けるのが目標。卒業後も無理をしないで参加を続けるメンバーもいる。「将来“気仙沼の人はハモるのが好き”となるぐらい楽しんでもらえると」そんな想いも膨らんでいる。

仲間由紀恵

Nakama Yukie

Text / Rie Shimtani Photo / Ko Hosokawa

Hair/Makeup / Hiroshi Tanaka Styling / Hiroko Sogawa

Costumes / MARELLA(SANKI SHOJI CO.,LTD.)(P26-29).

STRENESSE(SANKI SHOJI CO.,LTD.)(back cover)

最近は、あらためて役づくりの
楽しさを感じています。
自分じゃない者を演じるからこそ
思い切れるんです。



自分とかけ離れた役が
演技の幅を広げる

その美しさにドキドキする。現在、NHK連続テレビ小説『花子とアン』で、ヒロイン花子のよき友・蓮子を演じ、美しさと存在感ある演技で私たちが釘付けにする、女優の仲間由紀恵さん。彼女の内側にはいったいどんな情熱、ドキドキがあるのだろうか。

——代表作にしてヒット作である『TRICK』や『ごくせん』のイメージが強いからこそ、今回の蓮子のような役はとても新鮮に感じます。

そうなんです。でも、イメージが付いているからこそ次の作品で「全然違うね」と楽しんでもらえることもあります。そんな周りの反応が楽しくもあります。私自身も、この前はこういう感じだったから今回はこういう感じでやってみよう、というように自分の目標というか、役を突き詰めていくうえでの手助け、道しるべにもなっていますね。ですが、自分にまったくないものを演じなくてはならないときは戸惑うことも。それをどう理解して乗り越えるかが挑戦でもあります。

たとえば、テレビシリーズ『TRICK』の奈緒子のように、転んでみんなに笑われるお芝居。当時まだ二十歳そこそこで駆け出しだったので、どう演じていいのか、悩みました。そんなもがいている感じも、いま思えばよかったなあと思います。何とかして自分のなかで納得できるところを見つけて、これなら大丈夫という気持ちのうえで突破口を見つける、それが大変でした。後になってみてわかることなんですが、自分にとってちょっと大変だったな、と思った現場の方が、後からすごく評価されたり、いい言葉をかけてもらえることが多い気がするんです。そういうことを含めて、最近はおそらく役づくりの楽しさを感じています。自分じゃない者を演じるからこそその楽しさを、自分じゃないからこそ

思い切れるんです。

——いままで演じてきた役のなかで自分とかなりかけ離れていた役、思い切れた役はどの役ですか？

世界観を含めて、やっぱり『TRICK』の奈緒子ですね。今年『トリック劇場版ラストステージ』が公開になりましたけど、14年演じ続けてもわからないことだらけ、謎が多すぎるんです、このシリーズ(笑)。撮影現場にいるときも、謎を解いてはいけないう暗黙のルールみたいなものもあったほど。でも、そういう現場だからこそ教えてもらったこともあって。全部を完璧にわからなくてもいい、そんな作品や現場があってもいいという、ひとつの受け取り方ですね。

——たしかに、面白いだけではない、想像力を鍛えてくれるシリーズでした(笑)。14年、奈緒子を演じたことよって、奈緒子の要素が仲間さんに浸透したりしていますか？

もしかしたら、知らないあいだに奈緒子のあのヘンテコな要素が自分に植えつけられているのかもしれないですね(笑)。あの役から学んだのは、コミカルなお芝居をするときは笑わせようと思っちゃいけない、気負わないということ。お芝居のときも、今日のような写真撮影のときも、気負わないよう意識するようになりました。今日の撮影のイメージは、いま朝ドラの『花子とアン』の撮影中ということもあって蓮子ではあるんですけど、蓮子を演じていないときの私、現場にいるときの素の自分に近い感じですよ。

自分が年齢を重ねてきたということ、は、当然、二十代の若手の役者さんたちが増えていくということでもあって、『花子とアン』の現場で「先輩！」「仲間さん！」と声をかけてもらおうと、あ、そういう立ち位置になったんだなって。なので、気負わずに、でも先輩らしく、年上の人らしくそこに居たいし、お芝居に関しても引っぱってあげたい。彼らの頑張りを「見る」とい

ライバル心や競争心はないけれど、
自分が「好きだ！」と思ったことは
とことんのめり込むのが私らしさ。



う意識を持って現場にいたいんです。
なんだか、お母さんみたいです(笑)。
——ご自身のなかでのそういう変化を
感じたのは最近ですか？

この朝ドラですね。『ごくせん』は
教師役だったので生徒役の若い俳優さ
んがたくさんいましたけど、その作品
以外で、こんなにも若い役者さんのい
る現場はなかなかなかったので、すこ

く楽しいです。特に今回は吉高(由里
子)ちゃん主演として花子を頑張っ
て演じている。彼女を見ながら、ああ、
主演の人はこうやってみんなの手厚い
サポートを受けているのかと、みんな
が主演に愛情を注いでいる感じが見え
て、私自身も彼女を支えたいと思うん
です。自分が主演のときも同じように
みなさんがサポートしてくださってい

るのはわかっているんですが、具体
的なところまでは把握していなかっ
た。主役が知らないところでみんなが
ずっと主役のことを考えていて、いか
によく見えるか、いかに役が生きるか
を突き詰めてくれている。そういう姿
を見ると、なんて素晴らしいんだろ
うって思いますし、私も精いっぱいサ
ポートしたいって思うんですよ。

先輩から得たものを
受け止めて、そして後輩へ

——役柄的にも蓮子は花子の先輩でよ
き友。花子を支えています。そんな
蓮子が登場すると、場が引き締まるよ
うな存在感がありますね。

頭が大きいからというのもあるかも
しれないですね(笑)。蓮子のヘアス
タイルは地毛で結ってもらっているん
ですけど、あの格好であの頭で現場に
入ると、何だか楽しくなっちゃうんで
す。蓮子風に「何かしら?」「ごきげ
んよう」って言いながらみんなと話し
をするのが楽しくて仕方ない。それに
しても、あの格好は迫力ありますよね。
誰も寄せ付けない迫力(笑)。吉田鋼

太郎さんが蓮子の嫁ぎ先の旦那さん役
なんですけど、吉田さんと言えば(舞
台の)シェイクスピアのリア王、私に
とっては迫力のある大先輩です。そん
な吉田さんが相手でも、あのヘアスタ
イルなら私も隣に立てるかもしれない
い!と思いつながらやっています(笑)。

若い俳優さんとお芝居からも刺激
をもらっていますが、吉田さんのよう
に深みのあるお芝居をされる先輩とご
一緒するのは本当に楽しくて、ものす
ごく気持ちを引き上げてもらっていま
す。吉田さんが出演されているドラマ
や舞台を一観客として見ているときよ
りも、共演者として目の前という特等
席で大先輩の生の演技を見ることがで
きるので、吉田さんの気持ちの揺れが
ダイレクトに伝わってくるんです。そ
れはとても楽しいですし、役者として

そこに居るだけで

役の存在感を出せるような、

そんな女優になつていきたい。



写真協力: NHK

と思ったことはとことんのめり込むタイプ。それが私らしきなのかなと。経験を重ねたからこそ余裕とこれからの目標

当然、自分のなかにないものを求められることもあるので、それはプレッシャーですし、悩みます。最近で言うと『森光子を生きた女』というスペシャルドラマで森光子さんを演じさせてもらったんです。そのときは実際の森光子さんを演じるのではなく、台本のなかの森光子さんを演じようと思ったんですね。とは言っても、台本のなかの森光子さんとても強い女性。戦後の日本という時代で、どうしても芝居をやりたい、主演をやりたい、仕事をやりたいという熱い思いを持って、前へ前へと生きていた方。さっきも言ったように、私にはガツガツ感やキラキラ感がそなわっていないので、なかなか感覚がわからない。でも、監督はつねにそれを求めてくる。私の平常心よりもずっとずっと高いテンションで生きている方だったんですね、森光子さんという方は。

そういう役を演じるのはとても大変でしたが、作品が完成したあとにたくさん評価をいただけたんです。そのとき、あきらめずにギリギリのところまで頑張る、そしてさらにそれを超えられるようにその先を目指す、そうやっていくと新しいものを見つけられるんだなと思えました。でも、現場は本当に大変で。「わかつてますよっ!」って声をはりあげて監督とケンカするよいうなこともありました。いまは「必ずできる」と私を信じてくれた監督に感謝しています。

そういう現場にはさまざまなドキドキが詰まっていると思います。高揚感を感じる瞬間はどんな時ですか? そうですね、お芝居をしているといろんなドキドキがありますけど、いまやっている朝ドラ『花子とアン』でいうと、たとえば、吉田さんとのシーンで、お互いに気持ち激しく揺れ動くシーンを一緒に乗り越えていくお芝居はワクワクするしドキドキするし、心配も緊張もあります。その感覚はたまに楽しく瞬間ですね。

——そんな仲間さんの演じる蓮子を通じて、女性の生き方についても深く考えさせられます。考えますよね。思うのは、いまの時代の女性は働いて、家事もして、さらに女性らしくあつてほしいとか、そういうことが当たり前だよねって、求められていることが多い気がするんです。大変だなあと思って思います。もちろん、男性と対等に頑張れる、仕事においてはいい時代かもしれないけれど、私の場合は、ずっと仕事をしていて楽しい反面、仕事と私生活の境目がなくなつてしまつて、女性のしあわせがわからなくなっているのかもしれない。現在、35歳。先輩たちからは、30代はプレッシャーもあるけど楽になるよと聞いていて。たしかに、20代で経験してきたことを活かせる年齢ではありますね。すべて自由にはいかないけれど、やりたいことが明確に見えてきて、そこに向かって進んでいけるようになって、大きな目標ではなく小さなこと。お芝居においての、こう演じたいというものですけれど、30代40代でたくさん自分のなかに経験を貯えて、60代70代になったときに、役に入るとか役をつくるとかではなく、撮影現場にただ居るだけで、呼吸しているだけで、その役としての存在感を出せるような、そんな自然体で演じられる女優になつていきたいです。

——かけがえのない大切な時間ですね。スカウトされる以前から芸能界に興味はあつたんでしょうか? それとも、ほかに夢があつたのでしょうか? 芸能界の華やかな世界への憧れはごくふつうに持っていたと思います。憧れを持ちつつも、私、幼稚園の頃から10年ぐらい、ずっと琉球舞踊をやっていたんです。師範になるためのコンクールに出たりしていたので、きつとこのまま踊りの先生になるんだろうなっていう感じではありました。踊りは好きでしたから。その琉球舞踊がいまの女優の仕事に直接つながっている

かかわらないですが、続けるということを含めて、何か精神的な面で活かされていると思っています。

——舞踊は優美というイメージがあるからなのか、お話を伺っていてもそういったものを仲間さんから感じます。つねにそんなに穏やかなんですか? 昔からなんですけど、ライバル心がないんです。誰かがこうなつたから私もこうなりたいとか、そういう競争心がない。だから、若い頃は「君は仕事に興味を持っているのか?」と言われたこともありましたが(苦笑)。でも、自分が「こうしたい!」「好きだ!」

もたくさん学ばせてもらっています。そうやって先輩から得たものを今度自分自身が後輩に、というプレッシャーもあります。それはいままでにない新しいプレッシャーですね。——確実に前進して女優の道を開拓しているという証ですね。その道を歩くことになった、そもそのきつかけも伺いたいです。なぜ、女優になろうと思ったのでしょうか? 沖縄で育つて、スカウトに近い形でこの世界に入ったんですが、歌ったり踊ったりお芝居をしたり、いろいろ経験させてもらつて、高校を卒業すると

きにはお芝居に面白さを感じて、ずっとやっていきたいと思っていた気がします。大学はいつでも行けるけど、この仕事はいまじゃないとダメだつて、変な割り切り方ですよ(笑)。ただ、劇団に入っていたわけでもお芝居のレッスンを重ねてきたわけでもないのが、つり芝居を突き詰めてきた方と比べてたら勉強不足なところはあります。けれど、現場でしか吸収できないことも必ずあるはずで。多くの役者さんと同じく、お芝居をして、そうやって積ませてもらった経験とその時間は、私にとつてとても貴重なものです。

——かけがえのない大切な時間ですね。スカウトされる以前から芸能界に興味はあつたんでしょうか? それとも、ほかに夢があつたのでしょうか? 芸能界の華やかな世界への憧れはごくふつうに持っていたと思います。憧れを持ちつつも、私、幼稚園の頃から10年ぐらい、ずっと琉球舞踊をやっていたんです。師範になるためのコンクールに出たりしていたので、きつとこのまま踊りの先生になるんだろうなっていう感じではありました。踊りは好きでしたから。その琉球舞踊がいまの女優の仕事に直接つながっている

かかわらないですが、続けるということを含めて、何か精神的な面で活かされていると思っています。

——舞踊は優美というイメージがあるからなのか、お話を伺っていてもそういったものを仲間さんから感じます。つねにそんなに穏やかなんですか? 昔からなんですけど、ライバル心がないんです。誰かがこうなつたから私もこうなりたいとか、そういう競争心がない。だから、若い頃は「君は仕事に興味を持っているのか?」と言われたこともありましたが(苦笑)。でも、自分が「こうしたい!」「好きだ!」

もたくさん学ばせてもらっています。そうやって先輩から得たものを今度自分自身が後輩に、というプレッシャーもあります。それはいままでにない新しいプレッシャーですね。——確実に前進して女優の道を開拓しているという証ですね。その道を歩くことになった、そもそのきつかけも伺いたいです。なぜ、女優になろうと思ったのでしょうか? 沖縄で育つて、スカウトに近い形でこの世界に入ったんですが、歌ったり踊ったりお芝居をしたり、いろいろ経験させてもらつて、高校を卒業すると



仲間
由紀恵

ロングインタビュー